

2012年4月28日

関西国際大学・文部科学省共催/大学コンソーシアムひょうご神戸後援

「大学教育改革地域フォーラム 2012 in 関西国際大学」

～学生の主体的な学びを確立するため、どうすれば学修時間を確保できるか～

資 料

～ ご来場の皆さまへ ～

- ・ 本日の大学教育改革地域フォーラムの様子はビデオで撮影させていただきます。
- ・ 撮影した映像は、後日「Y o u T u b e」に設置する文部科学省公式動画チャンネルに掲載させていただきます。
- ・ ご自身の発言や映像を動画チャンネルに掲載することを希望されない場合は、本フォーラム終了後、事務局までお申し出下さい。

*本フォーラムでの撮影及び映像の配信につきまして、その趣旨をご理解いただき、何卒、ご協力いただけますようお願いいたします。

【登壇者プロフィール】

文部科学副大臣 高井 美穂 (たかい みほ)

平成15年11月から民主党の衆議院議員として国政に携われ、21年9月から22年10月までの間、民主党政権発足後最初の文部科学大臣政務官を勤められていましたが、その後、衆議院文部科学委員会筆頭理事、民主党副幹事長を経て、24年4月からは文部科学副大臣として、教育・文化に関わる幅広い行政をご担当されています。

文部科学省高等教育局長 板東 久美子 (ばんどう くみこ)

昭和52年から文部省及び文部科学省で行政に携われ、高等教育企画課長、人事課長、内閣府男女共同参画局長、生涯学習政策局長などを歴任された後、平成24年1月より高等教育局長となられております。

川嶋 太津夫 (かわしま たつお)

名古屋大学教育学部助手を経て、1993年に神戸大学大学教育研究センターに助教授として赴任。その後、1999年に教授に昇任。大学教育推進機構および大学院国際協力研究科教授。現在、第6期中央教育審議会大学分科会、大学院部会、大学教育部会各委員、初等中等教育分科会教育課程部会、高等学校教育部会各委員。大学評価・学位授与機構客員教授、国立大学協会入試委員会専門委員等。専門は、専攻分野は比較高等教育論、国際教育協力論。

浅野 考平 (あさの こうへい)

1978年近畿大学教養部専任講師、1981年関西学院大学理学部物理学科専任講師を経て、現在関西学院大学理工学部情報科学科教授、2002年4月から2011年3月まで関西学院大学副学長、2011年から大学基準協会大学評価委員会委員。専門は、情報科学。

小嶋 淳司 (こじま あつし)

がんこ寿司創業者。現在、がんこフードサービス株式会社代表取締役会長。大阪商工会議所副会頭。一代で現在のがんこフードサービス株式会社を築き上げる。農林水産大臣賞（外食産業 人材養成功労）・農林水産大臣賞（外食産業 ごはん食普及功労）・藍綬褒章受章・農林水産大臣賞（外食産業 地産地消推進功労）・旭日中綬章受章 など数々の賞を受賞。

濱 名 篤 (はまな あつし)

関西国際大学学長。大学コンソーシアムひょうご神戸理事長。中央教育審議会専門委員（大学分科会）、文部科学省学校法人運営調査委員、国立教育政策研究所評議員、大学入試センター運営審議会委員。専門は、教育社会学、高等教育論。

「大学教育改革地域フォーラム 2012 in 関西国際大学」
～学生の主体的な学びを確立するため、どうすれば学修時間を確保できるか～

■日 時 2012年4月28日(土) 13:30～16:00

■会 場 関西国際大学 KUIS ホール 3階(301教室)

[プログラム] パネルディスカッション

- 総合司会 関西国際大学 尼崎キャンパス事務部長 山崎浩一
- 13:30 主催大学挨拶 関西国際大学 学長 濱名 篤
- 13:40 映像(導入画像) 文部科学省
- 14:00 パネルディスカッション
進行・モデレーター 神戸大学教育推進機構教授 川嶋太津夫氏
- 14:05 特別パネリスト 文部科学副大臣 高井美穂氏
パネリスト 文科省高等教育局長 板東久美子氏
- 14:20 パネリスト 関西国際大学 学長 濱名 篤
～関西国際大学での教学マネジメントと質保証の取り組みから～
- 14:30 パネリスト 関西学院大学 理工学部教授 浅野考平氏
～教員から見た審議まとめ～
- 14:40 パネリスト がんこフードサービス株式会社 代表取締役会長
大阪商工会議所副会頭 小嶋淳司氏
～産業界から見た審議まとめ～
- 14:55 休 憩
- 15:05 学 生 発 言 関西国際大学
教育学部英語教育学科2年生 坂口智香
教育学部教育福祉学科4年生 藤田 歩
教育学部教育福祉学科4年生 山田佳奈
～審議会、文科省、大学、教員、産業界への意見～
- 15:20 パネルディスカッション
◆フロア学生「クリッカー」アンケート
(質疑応答)
- 15:55 モデレーターまとめ
神戸大学教育推進機構教授 川嶋太津夫氏
- 16:00 閉 会



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

**予測困難な時代における大学教育改革に向けて
～中央教育審議会大学教育部会「審議まとめ」について～**

平成24年4月28日

文部科学副大臣

高井 美穂

急激に変化し、将来予測が困難な時代

- 急激な少子高齢化の進行
- 過疎化、労働市場や産業・就業構造の流動化
- 経済を中心とするグローバル化、ボーダレス化
- ICT（情報通信技術）・情報化の発達・深化
- 環境問題・震災等の自然災害の深刻化
- 世界的なエネルギー不安、食料危機

大学教育の役割として期待されることは？

若者・学生

- ・専門的知見、ICT等を活用して新たなイノベーションを生み出せるか？
- ・社会福祉、医療、保育、科学技術等の成長分野での就業に結びつくか？
- ・時代を生き抜き、個人として発展する基盤としての技能が獲得できるか？

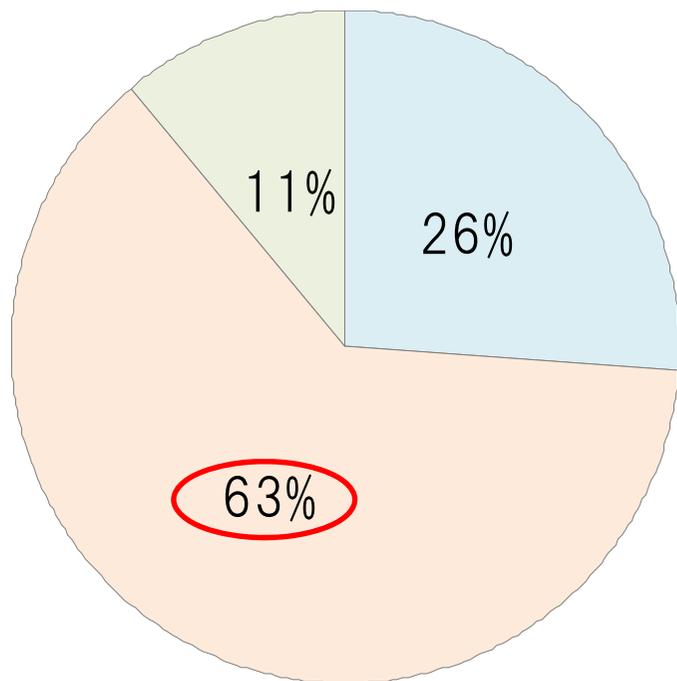
産業界・地域社会

- ・今後の変化に対応するための基礎的な力を持つ人材の育成
- ・生涯学ぶ習慣や主体的に考える力を持つ人材の育成
- ・どんな状況にも対応できる多様な人材の育成

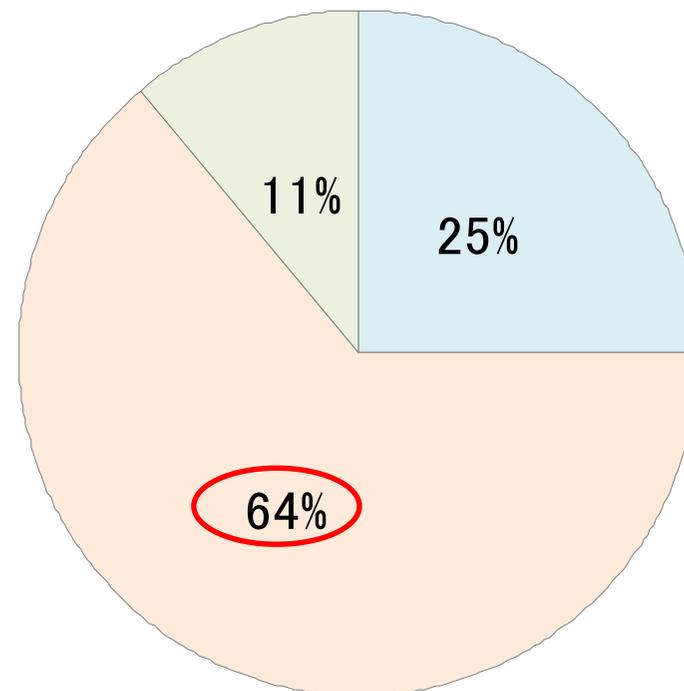
国民は、大学教育について現在の状況に満足していない。

新聞社の世論調査では、日本の大学が、世界に通用する人材や企業、社会が求める人材を育てているかとの質問に6割を超える国民が否定的な回答

○ 世界に通用する人材を育てることができていると思うか



○ 企業や社会が求める人材を育てることができていると思うか



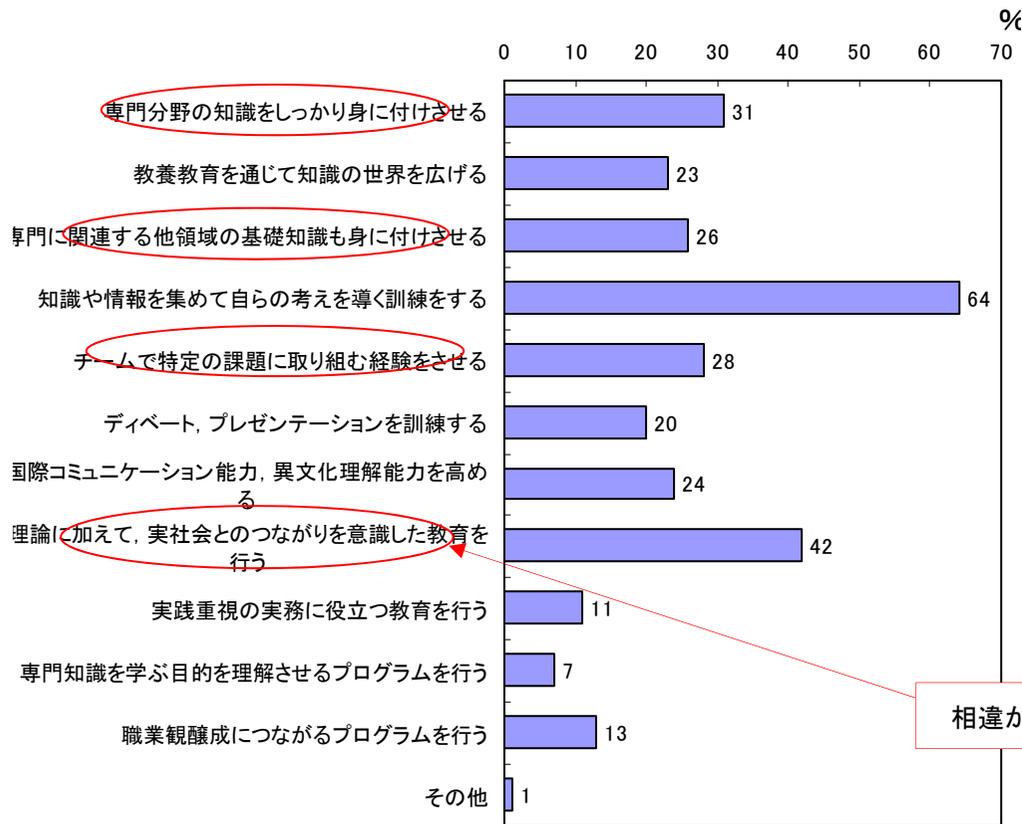
■ できている ■ できていない ■ その他・無回答

出典：朝日新聞社「教育」をテーマにした「全国世論調査」（2011.1.1【18面】）

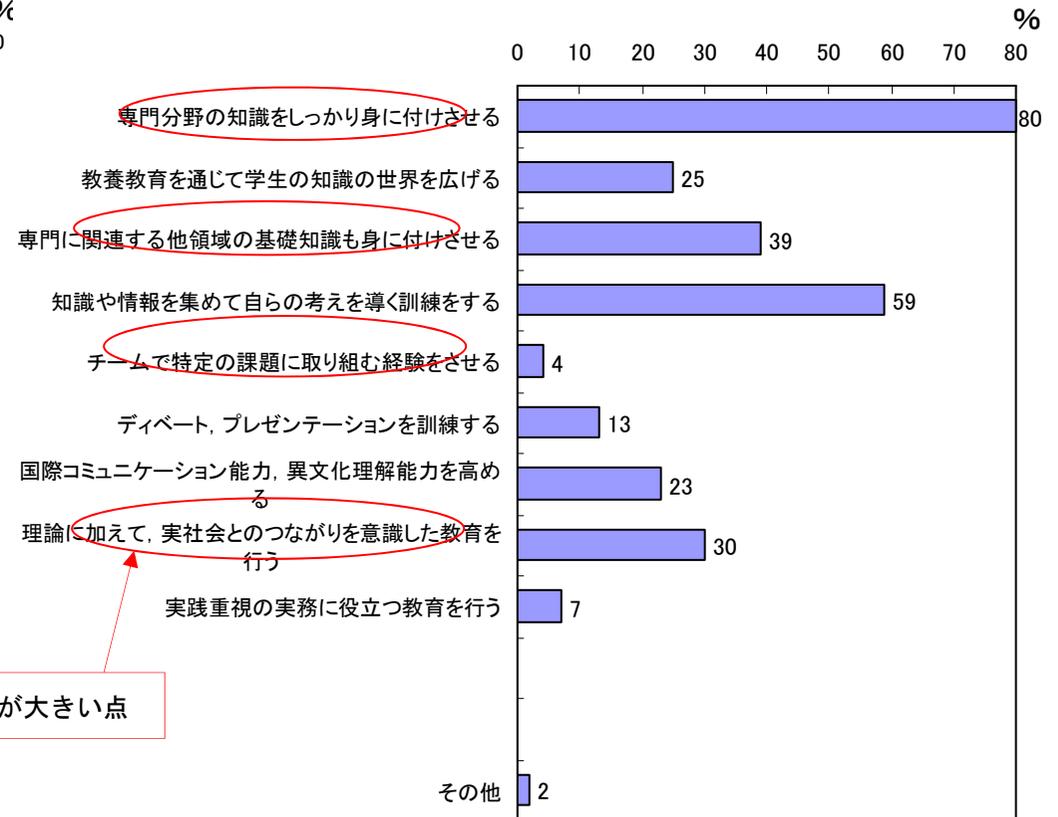
人材育成面での企業の期待と大学・大学院の取組について（1）

経済団体の調査によれば、企業の学士課程教育に対するニーズと大学が教育面で特に注力している点とは、特に「チームで特定の課題に取り組む経験をさせる」、「理論に加えて、実社会とのつながりを意識した教育を行う」などにおいてギャップがある。

企業の大学・大学院（文系）への期待



大学・大学院（文系）が教育面で特に注力している点



相違が大きい点

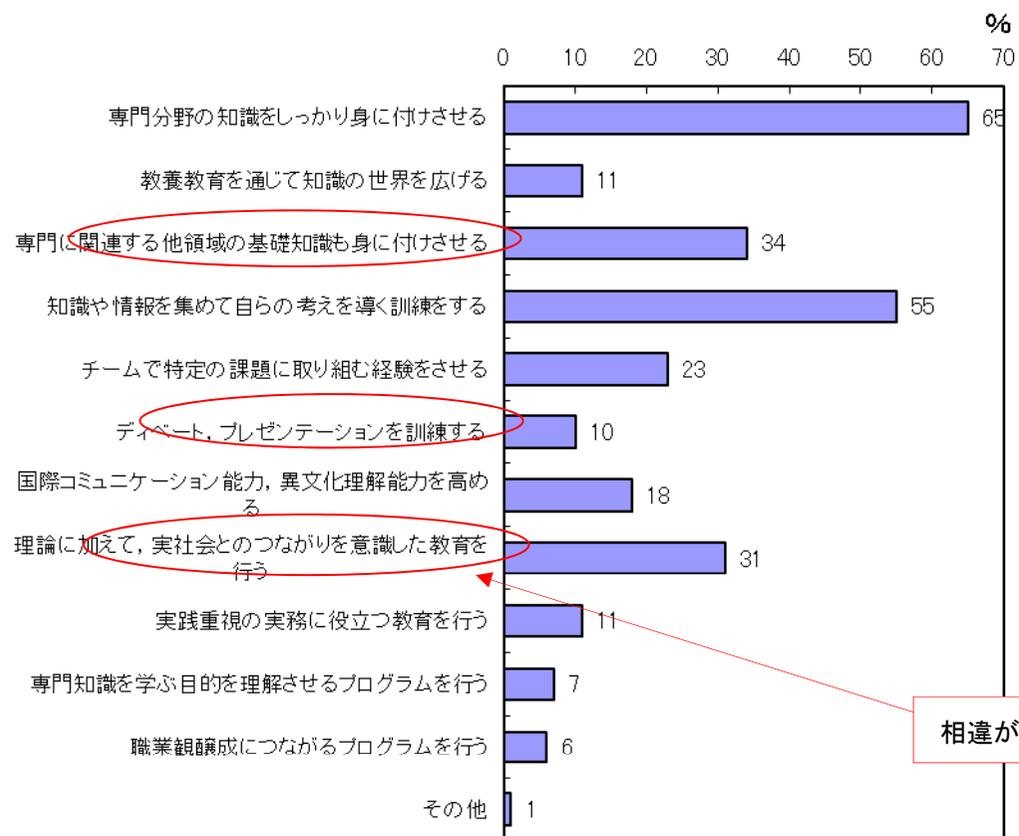
事務系人材を採用する立場から、大学・大学院（文系学部、学科、専攻）に対して人材育成の点で何を期待するか、684社に質問（3つまで選択）。684社に占める割合

学部生と、修士課程修了後に博士課程に進学せず就職する院生への教育にあたり、特に注力している点について、3つまで選択。

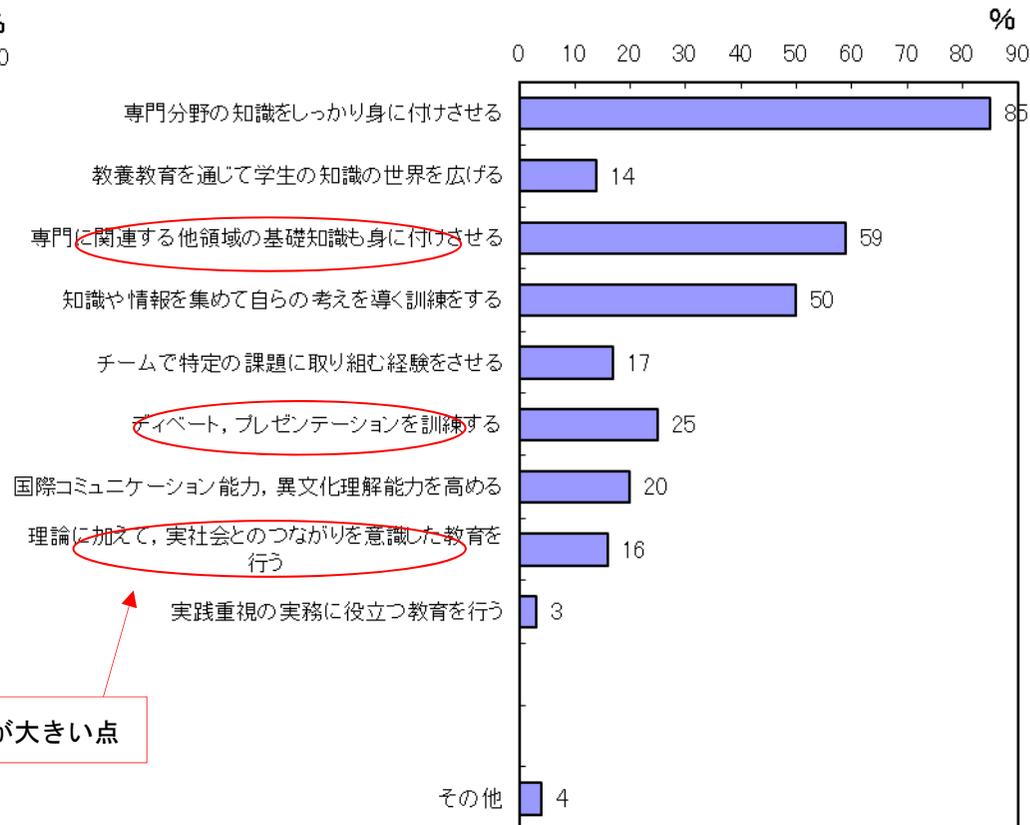
全国20大学のうち、回答のあった16大学の文系48学部と49研究科の合計に占める割合

人材育成面での企業の期待と大学・大学院の取組について（2）

企業の大学・大学院（理系）への期待



大学・大学院（理系）が教育面で特に注力している点



相違が大きい点

技術系人材を採用する立場から、大学・大学院（理系学部、学科、専攻）に対して人材育成の点で何を期待するか、520社に質問（3つまで選択）。520社に占める割合

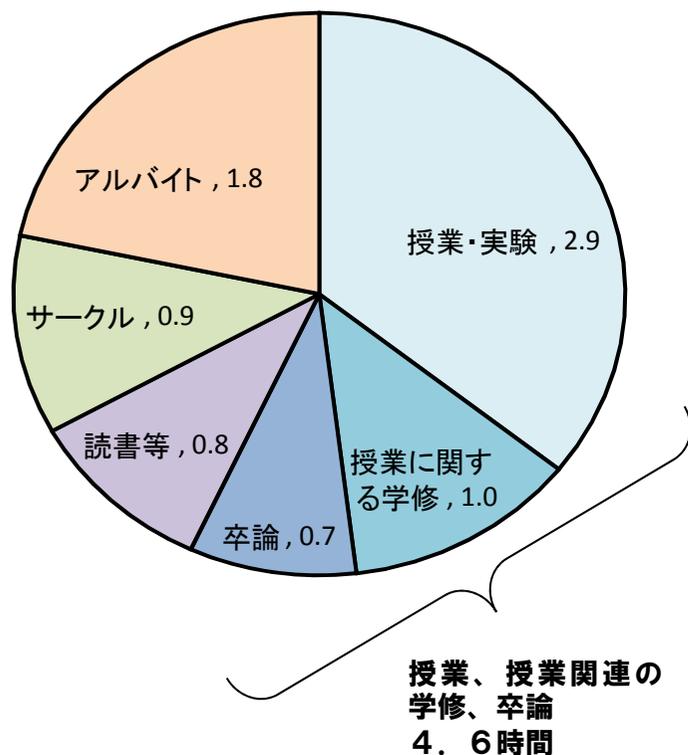
学部生と、修士課程修了後に博士課程に進学せず就職する院生への教育にあたり、特に注力している点について、3つまで選択。全国20大学のうち、回答のあった16大学の理系39学部と37研究科の合計に占める割合

【平成16年日本経団連「企業の求める人材像についてのアンケート結果」より作成】

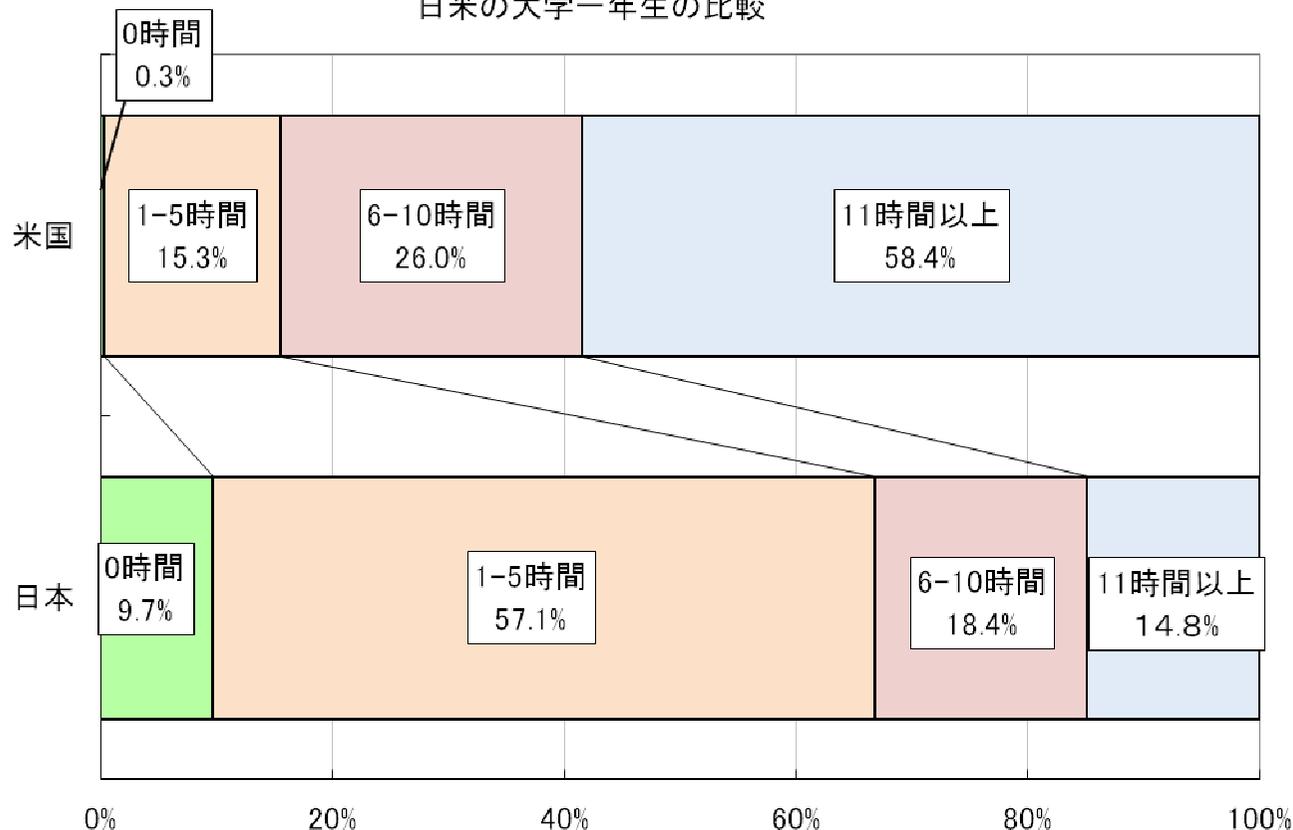
学生の学修時間の現状

我が国の学生の学修時間（授業、授業関連の学修、卒論）はその約半日の一日4.6時間とのデータもある。これは例えばアメリカの大学生と比較しても少ない。

学生の活動時間の分布(計 8.2時間)



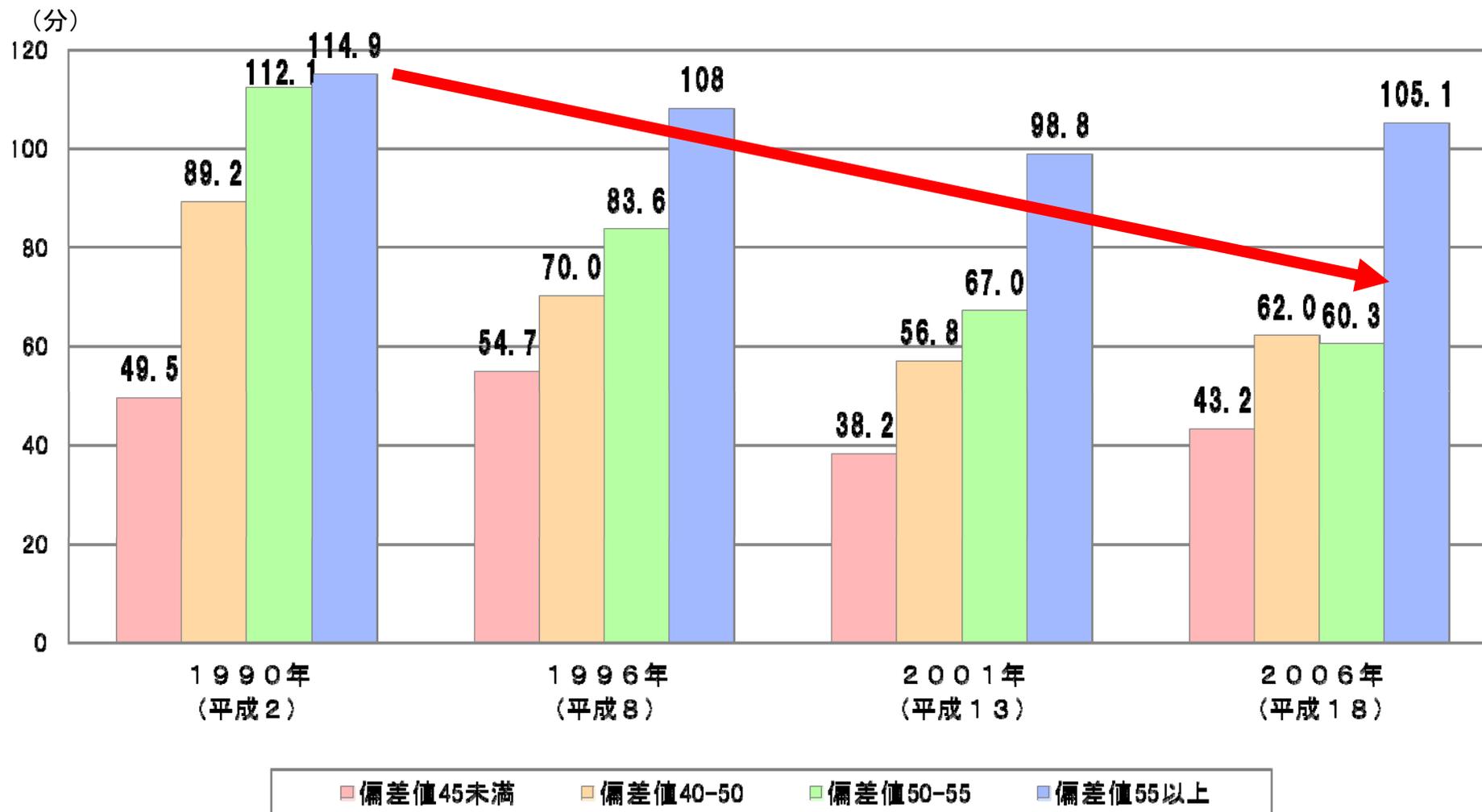
授業に関連する学修の時間(1週間あたり)
日米の大学一年生の比較



出典：東京大学 大学経営政策研究センター (CRUMP) 『全国大学生調査』2007年、サンプル数44,905人 <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>
NSSE (The National Survey of Student Engagement)

高校生の学校外における平日の勉強時間の推移

学力における中間層の勉強時間が大きく減少している。



(注) 勉強時間には、学習塾や予備校、家庭教師との学習時間を含む

【調査概要】高校2年生(普通科)4464人を対象に、全国4地域(東京・東北・四国・九州地方の都市部と郡部)で実施。
(出典) Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」

今、大学に求められるもの — 学士課程教育の質的転換 —

○ 今果たすべき学士課程教育の役割

- 学生にとって、
 - ① 大学において「答えのない問題」を発見してその原因について考え、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力を鍛えること
 - ② 実習や体験活動などを伴う質の高い効果的な教育によって知的な基礎に裏付けられた技術や技能を身に付けることは、自らの人生を切り拓くための最大の財産。
- 産業界や地域は、高度成長社会においては均質な人材の供給を求めたが、今は、生涯学ぶ習慣や主体的に考える力を持ち、予測困難な時代の中で、どんな状況にも対応できる多様な人材を求めている。

求められる質の高い学士課程教育

教員と学生とが意思疎通を図りつつ、相互に刺激を与えながら知的に成長する**課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）**によって、学生の思考力等を引き出し、その知性を鍛える双方向の講義、実技等の授業を中心とした教育。

生涯学び続け、主体的に考える力を持った人材を育成する**能動的な学修**には、**授業ための事前の準備、授業の受講、事後の展開**といった「**学修時間の増加・確保**」が不可欠。

○ 学生の主体的な学びに不可欠。

① 主体的な学びは大学での学びの本質

- ・ 学生が、授業のほか、主体的に事前・事後の学びに一定の期間取り組むことで単位を授与し、このような学修経験を体系的に深めることで学位を授与するのが大学制度。
- ・ 学修時間は、単に量の問題ではなく、質が伴うことが前提。

② 大学が学びを変えるための共通の第一歩

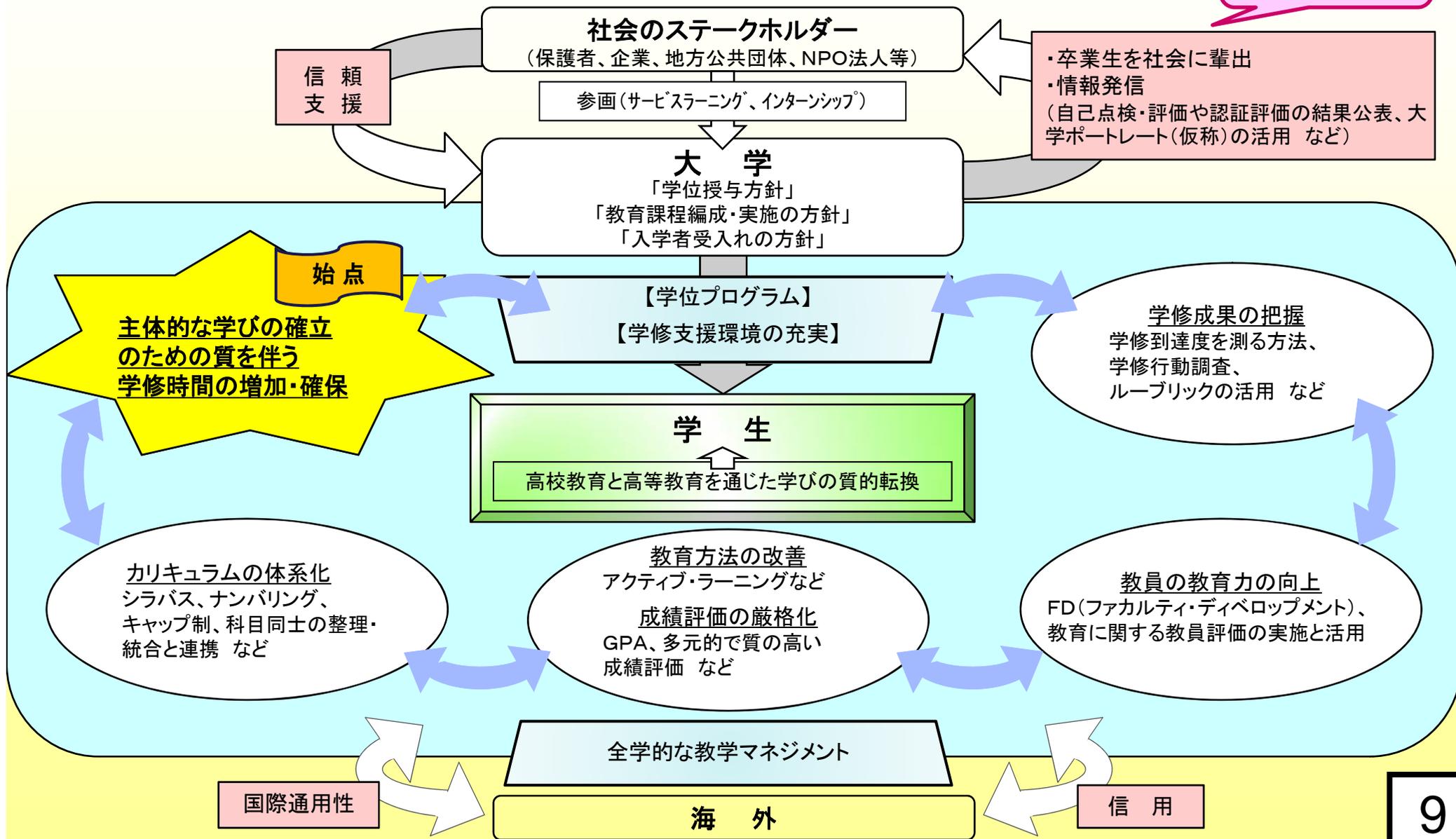
- ・ 大学ごとの教育の内容・方法の特色を妨げることなく、共通して大学での学修の質を転換するための第一歩となる。

③ 大学の国際的な信頼の源

- ・ 大学は常に国際的通用性が求められており、世界的にも学士課程教育の質の保証が課題。「学修時間の増加・確保」は、国際的な信頼の源として不可欠。

学士課程教育の質的転換への好循環の確立

このような好循環
が回ることが重要



これらの取組が行われるために

○ 教員が意識改革し、個々の授業が変わることが必要。

ひとつひとつの教室、教員にとどけるには

関係機関が、以下の取組を含めて、**各大学の大学教育の質を変えるための積極的な取組を継続的に支援**することが必要

①学生の学修到達度を測る方法等の研究・開発

アセスメントテスト(学修成果の測定・把握のための調査)、学びの行動調査、ループリック(学修の評価基準)等の活用。

②大学ポートレート(仮称)の早期整備

大学が教育情報を自らの活動状況を把握・分析することに活用。
大学の多様な教育活動の状況を、大学教育に関係・関心を持つ国内外の様々な方に分かりやすく発信。

③高校から大学にかけての学びの質の転換

勉強時間が半減している高校生、学力試験以外で入学する大学生の増加、学修時間が少ない学士課程教育という課題の中で、高校・大学入試・大学を通じた学びの質転換を推進。

④教育に関する教員評価の活用している大学への支援

個々の教員が役割を理解し、大学の方針に沿って十分な指導をしているか、組織的な教育への参加、貢献しているかを評価し、その結果を教員の教育力の向上・改善や処遇の決定、顕彰などに活用している大学への支援・奨励。

是非、お願いしたいこと

○ 「大学は主体的に学ぶところ」との原点に立ち返るために。

・ この「審議まとめ」を契機に、大学で、地域社会で、企業で学士課程教育の質的転換のために今直ちにどのような行動を始めるか、その好循環の確立のために何が必要かということを議論いただくことが重要。

その際、予測困難な時代を生き抜かなければならない若者や学生の力を具体的に伸ばすために、大学や教員、社会は今こそ行動することが必要だという認識の共有が必要。

・ 特に、「大学は学生が主体的に学ぶところである」という原点に立ち返るために、学生を始め大学関係者や保護者、企業関係者、地域やNPOの関係者等と直接積極的に議論を交わし、熟議を深めることも重要。

ご意見お待ちしております。（～6月30日（土））

○パブリック・コメント（意見公募手続）の実施

－中央教育審議会大学分科会大学教育部会「審議まとめ」－

（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/04/1319435.htm）

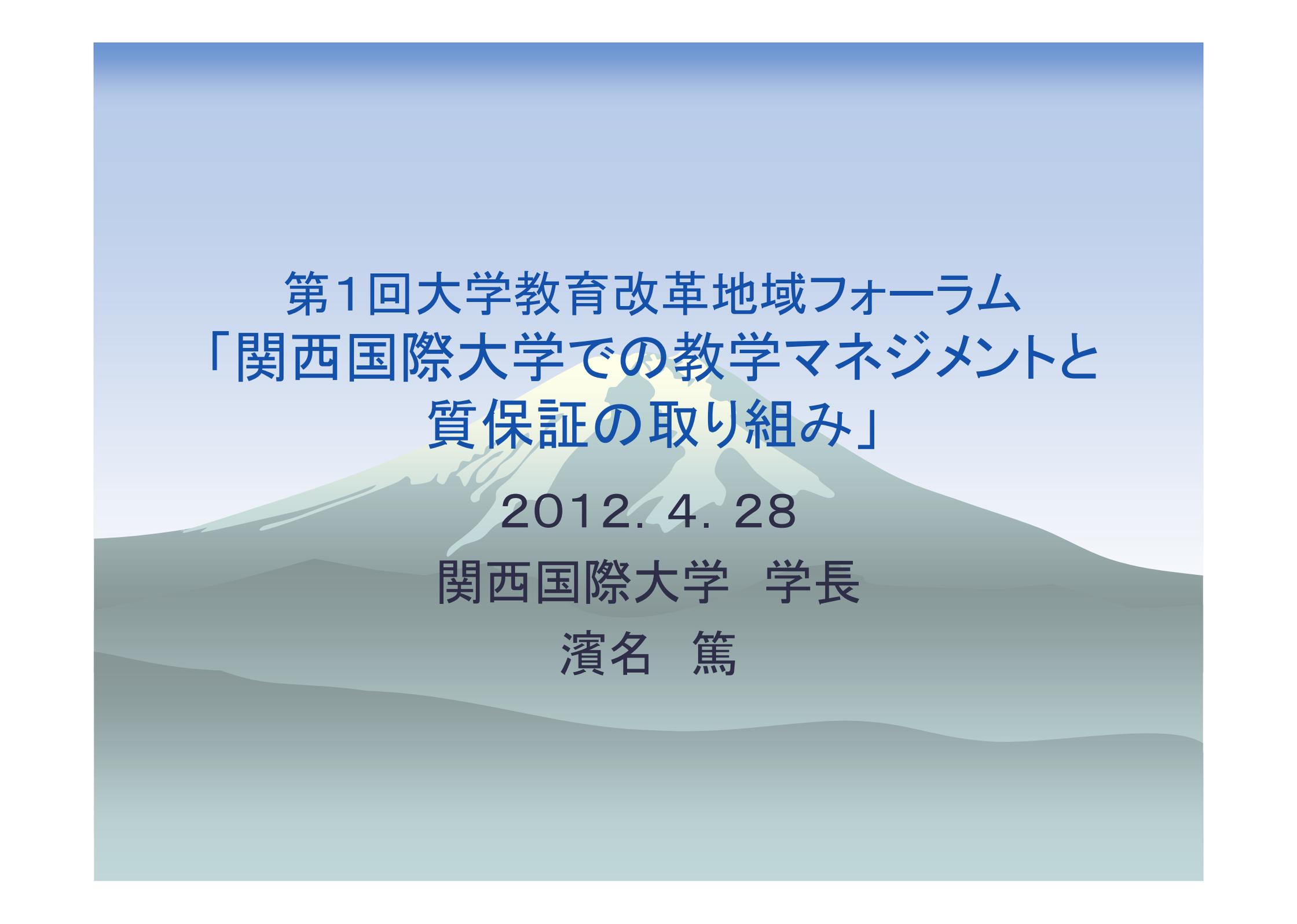
○「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（審議まとめ）

平成24年3月26日

中央教育審議会大学分科会大学教育部会

（<http://www.mext.go.jp/>

[b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm)）



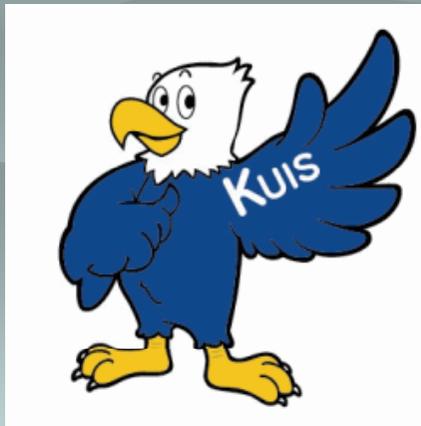
第1回大学教育改革地域フォーラム
「関西国際大学での教学マネジメントと
質保証の取り組み」

2012. 4. 28

関西国際大学 学長

濱名 篤

関西国際大学の 教育改革の流れと現状



関西国際大学の基本情報

○キャンパス:

兵庫県三木市(人間科学部、大学院)

尼崎市(教育学部)

○学生数:学部1,783人 大学院17人

○専任教員数:77人 (2012年4月1日現在)

1998年に関西女学院短期大学(1987年設立)を母体に開学

“教育”重視の建学の精神 + 後発大学の抱える“多様性”対応

本学の教育の指針

建学の精神(1950)

- ・「**以愛為園**」(愛の園幼稚園と命名)
- ・人に対する思いやり、人を受け入れる姿勢をもった人間教育
- ・“**教育愛**”の重視

↓
関西国際大学の教育目標(1998)

↓
KUIS学習ベンチマーク(2006)

本学の教育目標

関西国際大学は、

「世界的視野に立ち、人間愛に溢れ、創造性豊かで、
行動力を持つ人間の育成をめざす知性あふれる学問の場」
であるという教育理念の下に、

- 自己に厳しく、たえず努力し続ける、自律できる人間の育成
- 積極的に行動し、社会に貢献できる人間の育成
- 世界の人々と共感しあえ、互いに高めあえる、
心豊かな世界市民の育成

という3つの教育目標を開学時に設定

KUIS学習ベンチマーク

- ◆ 自律できる人間であろう
自己に厳しく、絶えず努力し続ける人間
 - ◆ 社会に貢献できる人間であろう
自ら創造し、積極的に行動する人間
 - ◆ 心豊かな世界市民であろう
世界の人々と共に生き、互いを高めうる人間
- +
- ◆ 問題解決能力を身につける
情報ツール・効率的な情報収集・正しい分析
 - ◆ コミュニケーション能力を身につける
他人の考えを正しく理解・自分の考えを的確に表現・意見交換

→これらの力を総合的に活用できるように

教育理念を達成するための学びのツール

自律できる人間であるために

KUIS学習ベンチマーク

ディプロマポリシー

カリキュラムマップ

eポートフォリオ

リフレクションデイ

自律的
学習者

サービスラーニング

グローバルスタディ

インターンシップ

・海外フィールドスタディ

フィールドスタディ

・交換留学

・海外インターンシップ

社会に貢献できる人間であるために

心豊かな世界市民であるために

教育改革に関する全学的な取組の流れ

年度	教育改革の経緯	特記事項(採択GP)
1998	【開学】学習支援センター設置	
2002	▼初年次教育	
2004	▼ポートフォリオ(特定学部)	特色GP(学習支援)
2005	▼ポートフォリオ(全学展開) ◇学習ベンチマーク	
2006	▼KUIS学習ベンチマーク 制定 ◇▼アクティブラーニング	参加型授業展開 ・特色GP(初年次教育) ・現代GP (地域連携、SLモデル)
2007	▼E-ポートフォリオ(移行)	
2008	◇サービスラーニング ▼初年次サービスラーニング(開始) ▼サービスラーニング(展開)	◎教育GP(初年次サービスラーニング) □戦略GP(大学コンソーシアムひょうご神戸)
2009	【尼崎C 開設】 ▼科目クラスター化 ◇ルーブリック ◇IRデータベース開発 ◇グローバルスタディ	◎大学教育推進プログラム(科目クラスター化) ◎学生支援推進プログラム(キャリア支援) ■戦略的大学連携推進事業(学習支援型IR)
2010	◇リフレクションデー	

学びに気づく社会貢献

参加型授業展開

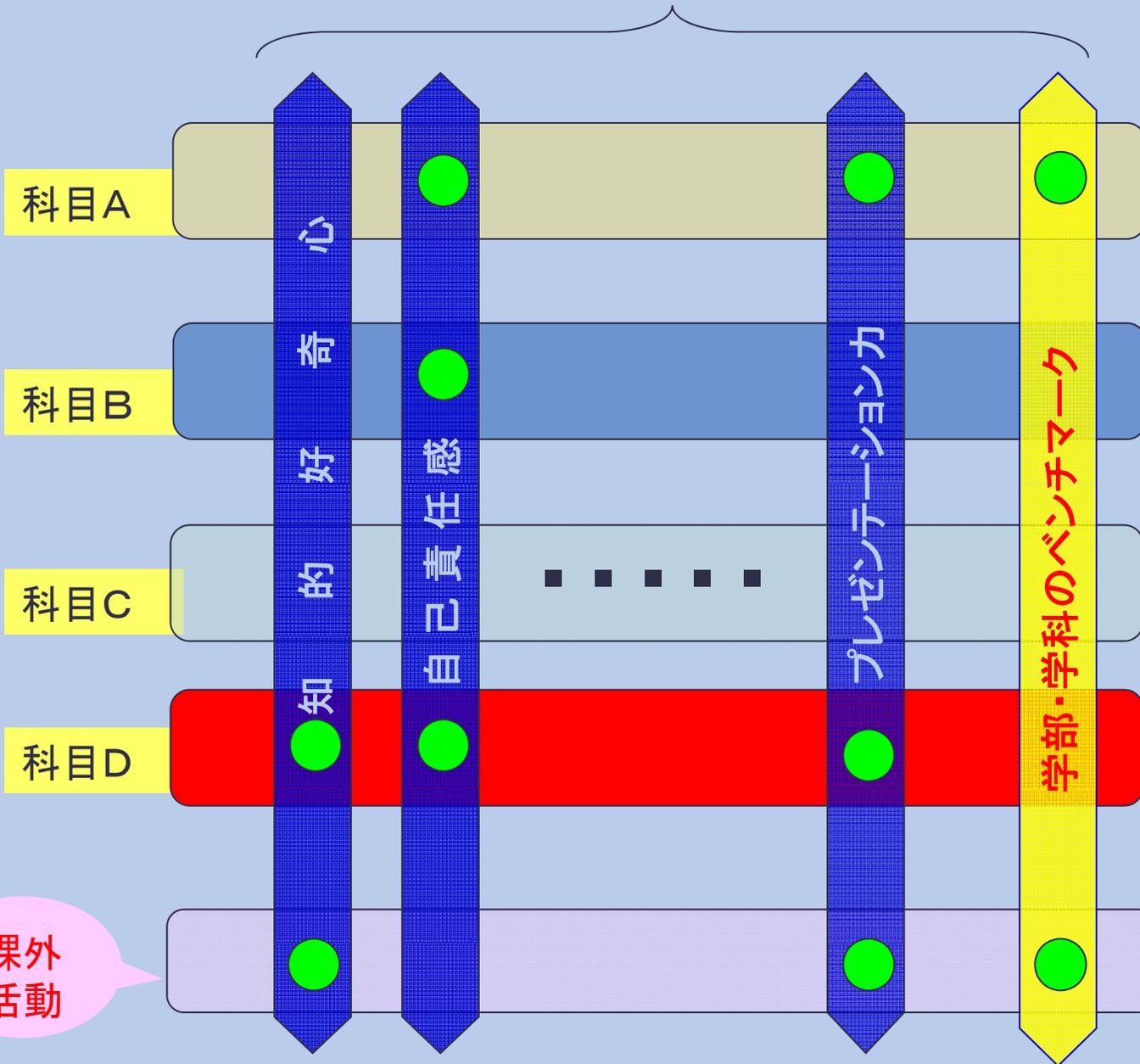
教育上の課題と改善への中期目標(2006～現在)

- ①【**学習目標**】(全学+学部・学科単位)学習目標の明確化
- ②【**教育内容**】それに則した教育内容の縦の体系化と科目間の横の連携の強化
- ③【**教育方法**】そのためにアクティブラーニングの活用と教室外体験学習方法(サービスマーケティング、インターンシップ、フィールドスタディ等)の有機的活用
- ④【**教育評価**】形成的評価と総括的評価の双方を組み入れ、科目や学科の教育目標に適した評価を実現し、教育評価の可視化(IRやルーブリックの開発)、学生自身の学修成果の可視化(eポートフォリオ、リフレクション・ディ他)
- ⑤【**教育組織**】教員が個々ばらばらに教育を行うのではなく、学部・学科の単位で組織目標に向けての目的や現状についての認識共有を行い、学部長・学科長のリーダーシップの下で、組織的に教育研究活動を実現できうる教育組織の有機的連携・協力、が必要になってくる。

科目間・教員間連携による教育の構造化が必要！

- ◆ 日本の高等教育は何故、小中学校より国際的評価が低いのか？
- ◆ 12科目を同時に履修しているとすれば、
1科目のエフォート率は平均8～9%にすぎない!?
- ◆ 「年2回だけ試験勉強」→「年4回だけ勉強」？
- ◆ グループワーク課題も毎週複数科目では協働機会が
つukれない(cf.アルバイト回数・時間)
- ◆ 教育・学習目標も教員任せだと偏りが大きい
- ◆ 科目間・教員間連携の集約型が**カリキュラム・マップ**
科目間の縦と横のつながりの可視化→実体化

ベンチマーク項目



教科・科目の目標

実質的な教員間連携を構築する コモン・ルーブリック評価

- ①評価基準の共有化：学生および教員間でルーブリックの観点を共有
- ②評価の方法：課題の出し方やタイミングを教員間で連携する
- ③フィードバック：継続的に同じルーブリックで評価されるよう、返却時期やタイミングを教員間で連携する

* 関連する事項として、教材やテキストや学生の学習スキルの伸長状況を教員間で共有する

ex. 複数科目をもとに、①評価の観点を共有する。②期間を定めてレポートを課す。③タイミングを調整しフィードバックする(レポートとフィードバックのタイミングは調整の上、毎週何かの科目のレポートがあり、かつフィードバックがあることが望ましい?)。④学習スキルの伸長状況を教員間で共有する(課題レポートの回覧が効果的か?)

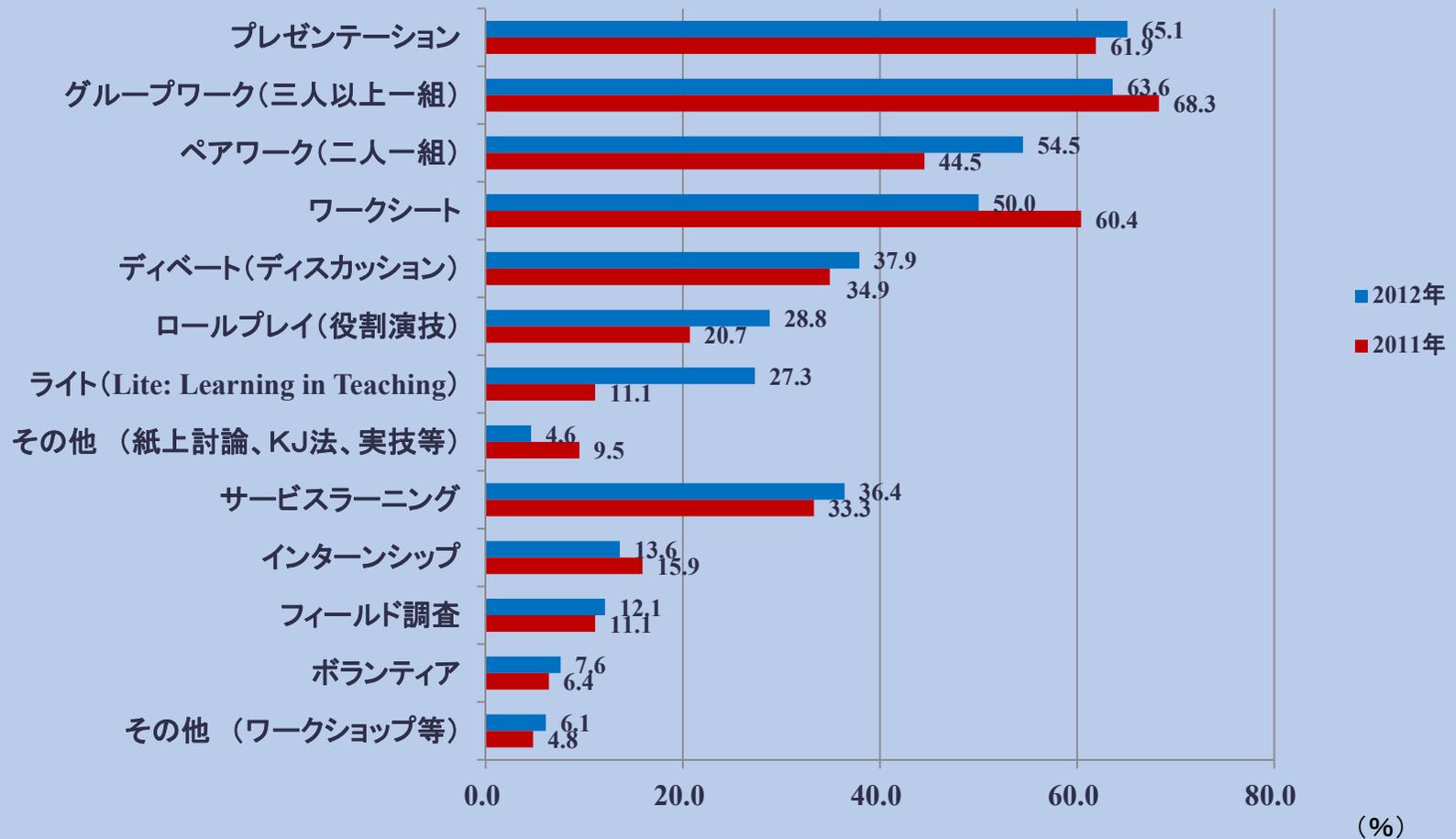
本学でのアクティブラーニングの導入状況

N=66 (2012年)
N=63 (2011年)

■ 講義科目の中で用いたActive Learning 手法 (複数回答)
□ 授業に取り入れた教室外活動の種類 (複数回答)

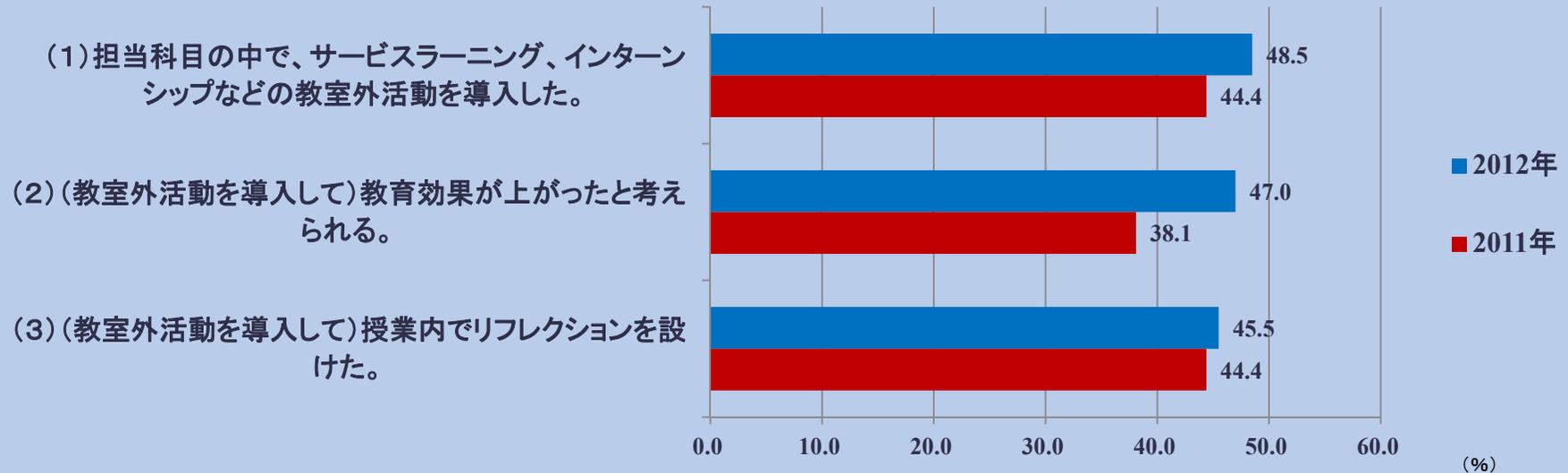
Learning手法
■ 講義科目の中で用いたActive Learning手法

室外活動の種類
□ 授業に取り入れた教室外活動の種類



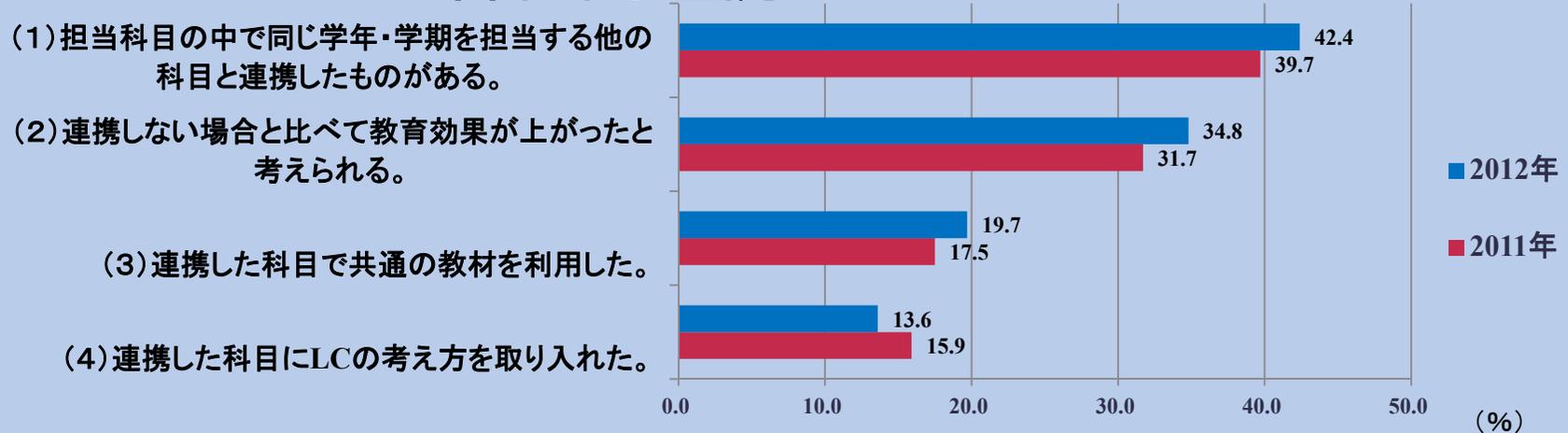
教室外活動の導入について

N=66 (2012年)
N=63 (2011年)



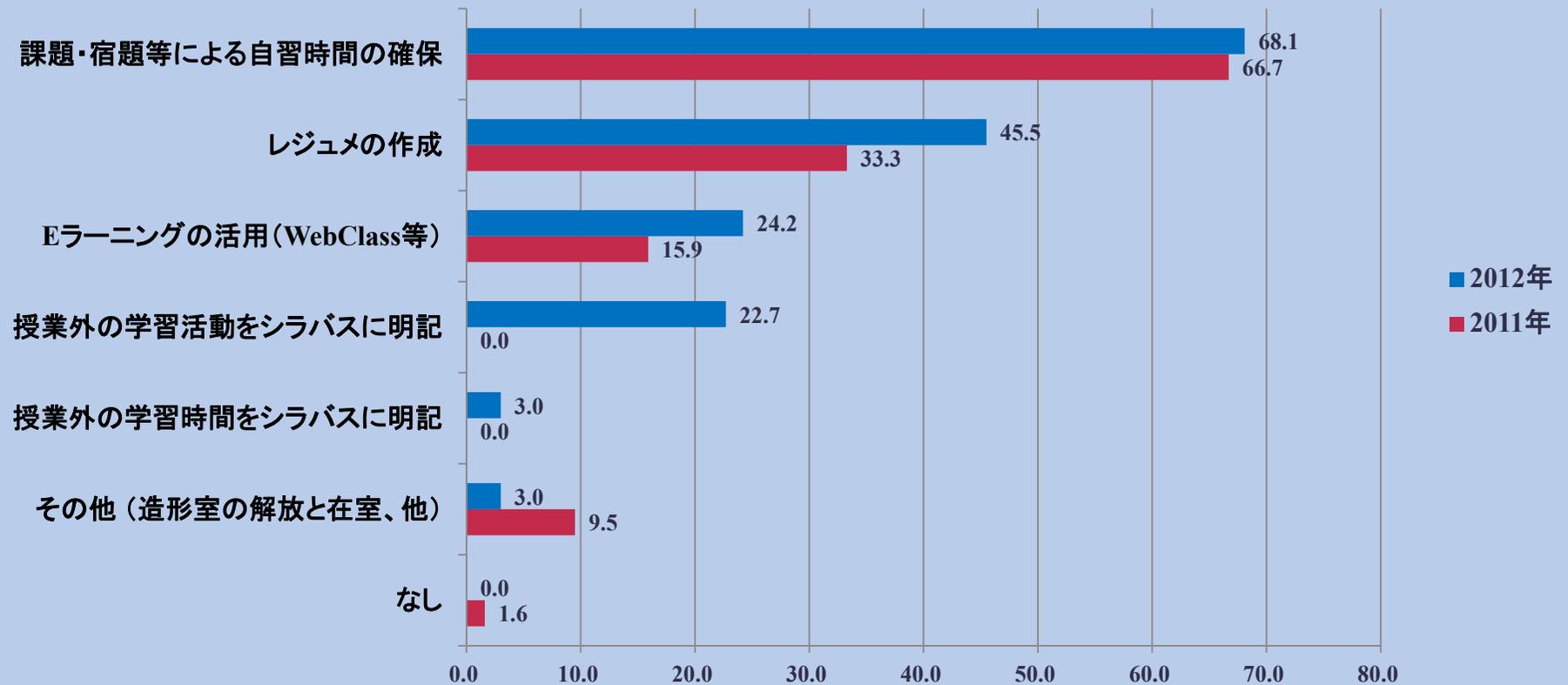
科目間連携について

N=66 (2012年)
N=63 (2011年)



授業時間外での学習時間のために行った工夫

(複数回答)



(%)

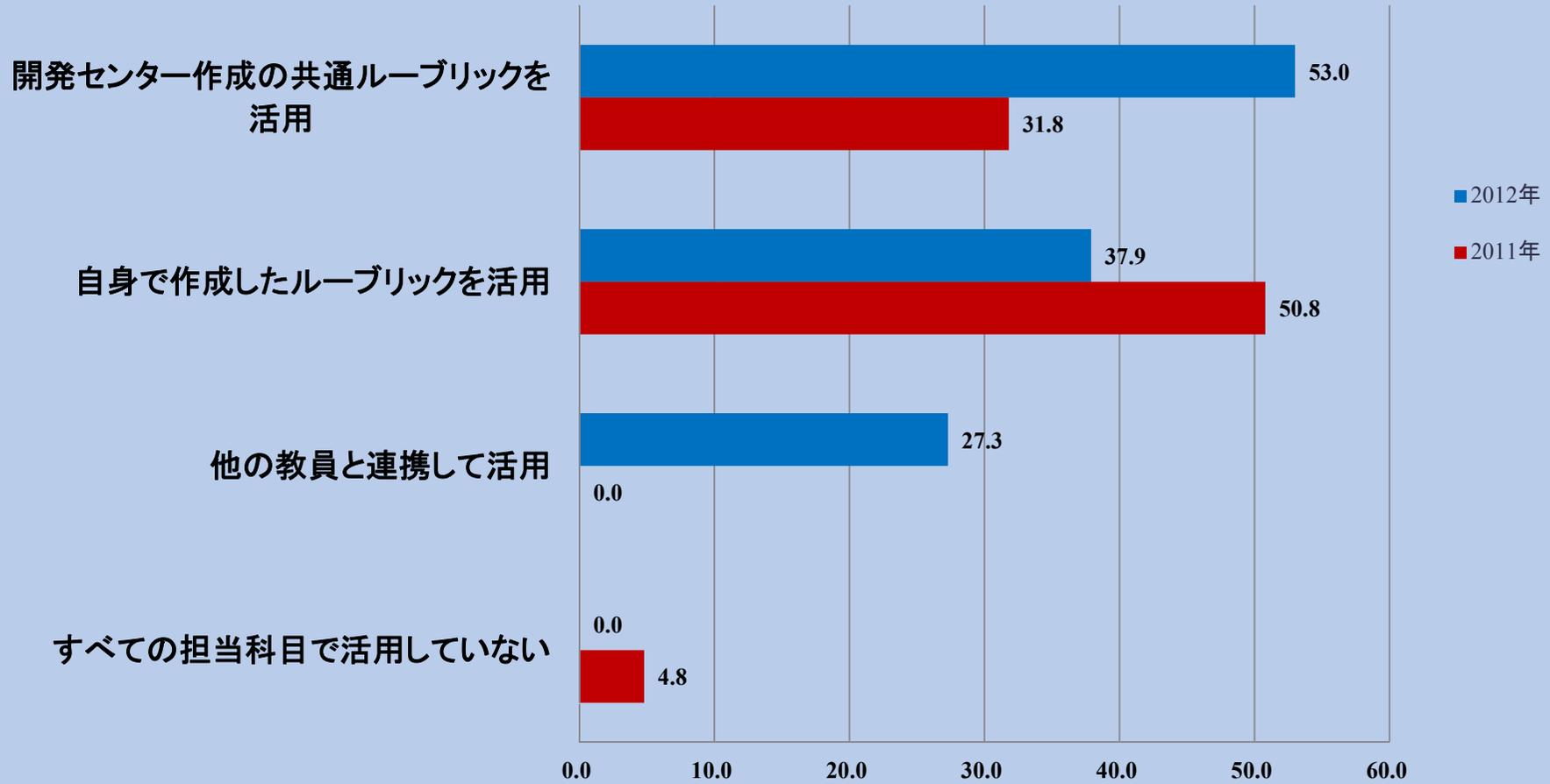
N=66 (2012年)

N=63 (2011年)

注意:「授業外の学習活動をシラバスに明記」と「授業外の学習時間をシラバスに明記」の項目は2012年のみ質問。

ルーブリックの活用状況

(複数回答)



(%)
N=66 (2012年)
N=63 (2011年)

注意:「他の教員と連携して活用」の項目は2012年のみ質問。

どのようにして学士課程教育の改革を 結実させていくのか？

1. 「点」ではダメ、「線」から「面」へ→「立体」化

2. 組織的に、継続的に進めていく “組織的な継続こそが力”

◆ 現状分析を踏まえて、大学としての“到達目標”を設定し、
わかりやすい“目標(中期・短期)”を設定することが起点

◆ “目標”の達成度をどう可視化するかのプラン→継続課題

◆ “目標”に準拠した教育内容・方法の選択をし、ステップ・バイ・ス
テップでの組織的な実行

◆ 組織的な改革に対する大学、教員、学生へのインセンティブも
必要

3. 個別大学、高等教育だけでは解決できない**学校教育全体のマス
タープランが不可欠**(高大接続はもちろん) cf. K16

4. **教育界を超えた、“人を育てる”ことへの参画**をつくり出す必要

審議のまとめを読んで（大学教員の立場から）

関西学院大学 浅野 考平

（1） 大学教員は「審議のまとめ」をどう受け取るか

学士課程教育の質的転換が喫緊の課題であることは、日々学生と接している教員は切実に感じている。質的転換の第一歩として「教員が個々の授業を質的に進化させる」ことで、「質を伴った学修時間の実質的な増加・確保による学生の主体的学び」を確立する、という趣旨についても了解できる。さらには、個々の授業の進化について、まずは教員の努力が求められていることについても、多くの教員は納得すると思われる。そのことを前提に、一人の教員の立場から、これらの認識が、現実に個々の授業の進化、個別の大学や我が国の学士課程教育の質的転換に結実するためには、何が必要と考えられるか、について述べる。

（2） 教員の“研究重視”と「授業の進化」

教員の役割は教育と研究である。教員は、教育の重要性は理解しているが本音は研究重視である。一方、1970年代に指摘された「教育は研究の妨げとなりうるし、反対に研究は教育の妨げともなりうる。」「両者が一つの枠内におさまるのは特別な条件の下のみで可能性がある。」（ベン＝デイビッド）という問題は未だに解消されていない。

「審議のまとめ」で言う教育すなわち、「学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛え、課題の発見や具体化からその解決へと向かう力の基礎を身につけることを目指す能動的な授業を中心とした」教育は、ますます、研究とはかけ離れ、しかも手間ひまのかかるものであり、研究との両立が困難である。

産学連携、産官学連携という言葉が頻繁に登場することに示されているように、社会の研究機関としての大学への期待も大きい。教員の学士課程教育上の課題に対する認識を、実際に個々の授業の進化に結びつけるためには、少なくとも教育と研究をどのようにして両立させるかという問題意識が行政にも、大学にも必要である。学士課程教育の質的転換を図るためには、大学における研究の振興と合わせた施策が必要である。

（3） 学生の「主体的学びの確立」と学生の消費者意識

1990年代には、学生の消費者意識を高め、そのことによって大学の教育を改善しようとする、学生消費者主義という考え方があった。消費者意識とは、学生は、学校が提供する教育というサービスを受け、その対価として授業料や学費を支払う、すなわち学生は学校が提供するサービスの消費者であるという意識のことである。しかし、消費者意識では主体的学びは確立できない。学生消費者主義では教育は良くならない。個人的利益のみを動機とすることには限界があるからである。

教員は、学生を社会人として一人前に育てることは、教育機関に勤めるものとしての社会への責任であり、学生は、学ぶことは社会への義務であると考え、ことこそが学生の動機付けとなりうる。

関西国際大学「大学教育改革地域フォーラム」

がんこフードサービス株式会社

会 長 小 嶋 淳 司

1. 私が大学で学んだこと

2. 経済界の大学と学生への期待

(1) 産業界が求める人材

(2) 学生への期待

(3) 大学改革への提言

以 上